

Modification の形態について

四方田 敏

- 〈目次〉
- 1 はじめに
 - 2 形容詞による前方からの修飾
 - 3 後方からの修飾
 - 4 むすび

1 はじめに

言語形式のある構成要素が、他の構成要素に附加されて、その意味内容を限定することが起こる。そしてこの種の限定を修飾(Modification)といい、この機能をはたす構成要素を修飾語(Modifier)と呼ぶのである。Modifier は基本文型に対して附加的な構成要素であるが、それは重要でないということにはならない。ただ基本文型から省いて考えられるという意味で附加語である。

この修飾語に対してその中心語となるものは言語構造において最も基本的な機能をはたす名詞と動詞であり、前者を修飾するものを形容詞的修飾語といい、後者を修飾するものを副詞的修飾語とよぶが、この論文では、形容詞的修飾語を中心にして考察する。

2 形容詞による前方からの修飾

いくつかの形容詞が前方からその中心をなす名詞を修飾する場合、そこに語順の問題が起こるのである。しかし、この語順にも原則的なものがあるのであ

る。つまり、①冠詞、②序数、③数量、④大きさ、⑤性状、⑥色彩、⑦材料、所属+名詞、の順序をとるものと考えられる。この語順の中でも、固定していて、まず不動と考えてよいものは、①冠詞+②序数+③数量の、この3つの語順である。ここには問題はないと言える。しかし、④の大きさと⑤の性状、の語順については原則が破られることがあり、若干の動揺が見られる。一方、名詞に近接した位置をとる形容詞は“材料”、“国家名及び国語名”を表わすもの、形容詞の機能を持たせられた名詞、さらに、“曜日”、“月日”、“四季”を表わす名詞、等である。これらはほとんど義務的と言ってよいほど、名詞に近接した位置を占めるのである。つまり、それだけ特殊性の強い語なのである。

以下、種々な修飾の形態について述べることにする。

2-1 性状を表わす形容詞+(大きさと形)の形容詞

(1) She saw suddenly her *placid little* hands in their black lace mitts.
—Mithell, *Gone with the Wind* (彼女は黒いレースの長手袋をはめた彼女の落着いた小さな手を突然見た)

(2) Tom and the *lazy long-legged* twins with their love of gossip and their absurd practical jokes. —*Ibid.* (トムとあの怠惰な、うわさ話が大好きで、愚にもつかぬ悪ふざけをする足長のふたごたち)

(3) a *solitary small* boat hangs in lonely immobility in the infinite waste of the ocean. —Faulkner, *The Bear* (一隻の小舟が寂しげに、はてしない荒涼とした大海に、動かずにぼつんと漂っている)

(4) He had his Jasper Milliron written in kind of a *shaky immature* round hand
—Passos, *Mid-century* (彼は彼の名前の Jasper Milliron を震えて、拙い、丸っこい筆跡で書いていた)

(5) I'd find me a playmate with kinda sultry blond hair and *beautiful big* bubs
—*Ibid.* (私は少し官能的な金髪の、美しく大きいボインを持つ女友達を見つけたらう)

上例はいずれも大きさ+性状の形容詞の普通の語順が逆になっている。次に“性状”と“色彩”の語順が逆転した例文を示してみる。

(6) Maddie stared back at him out of big black *troubled eyes* — Dos Passos, *Mid-century* (マディーは大きな黒い不安そうな視線を彼に返した)

(7) Bennett was a tall pale *quiet broad-shouldered man* with an abstracted manner. — *Ibid.* (ベネットは背の高い、肩幅のひろい、青白い顔をした、どこかぼんやりした物静かな人であった)

(6)の例では(表情が)“心配そうな”の意味の *troubled* と *eyes* の結合は密接であるとも考えられるし、(7)の場合は *broad-shouldered* という語は人間の、しかも主に男性を形容する語であって、その意味で、限定的な特殊性のある語であるから *man* との結合力が強いと思われる。

2-2 Young man や old man の用法

young man(青年), *old man*(老人)はあたかも一語のように結合力の強い語句である。

(1) The son, a steady respectable *young man*, was amply provided for by the fortune of his mother. — Jane Austin, *Sense and Sensibility* (その息子、つまり、しっかりしている立派なその青年は、母親の財産でなに不自由ない暮らしができた)

(2) He was a grave, fine-looking *old man*. — Mansfield, *At the Bay* (彼は厳格そうな、りっぱな風采をした老人であった)

young man は一語の名詞 *youth* で言い替えが可能であり、“青年”というまとまった一つの実体観念を表わすのであり、又 *old man* も *young man* に準じて考えることができる。上例でも分るように、*young man*, *old man* の結合度は極めて高いのである。

形容詞の中でも、*American* や *Japanese* は前述したように特殊性の強い意味を表わす語である。しかし、アメリカの青年というのは、*American young people* であって、ここでも、*young people* の結合力は非常に強いのである。

しかるに、これが“一人の若いアメリカ人の少女”となると、*a young American girl* となるのであって、Douglas Stout という米人の学者がそう書いているのである。これは *girl* という語が“性別”を強く表わす語であるために、*young man*

や young people と同様の結合の仕方をなすものとは言えない。又イギリスの文
 学者 Kirkup によれば, young Japanese engineer である。又同氏は some of the
 greatest French, British and Italian young designers と書いている。これは
 young を French の前に置くと, French, British and Italian という長い語句が間
 にはさまって young と designers との間隔が開きすぎるからであろうか? さ
 らに同氏は brilliant young Japanese designers と書いている。これが書き方とし
 ては順当であると思える。young designers は young man=youth, young people=
 youths のように一語で言い替えられる性質のものではないからである。

2-3 名詞に近接して位置する修飾語

(a) 月名, 四季などの名詞

(1) He looked up at the bright, high blue *early-summer* sky so he raised the
 leather wine bottle with his good arm. —Hemingway, *For Whom the Bell Tolls*
 (彼は晴れわたった高い初夏の青空を見上げながら, 良い方の腕でなめし革の酒
 びんを持ち上げた)

(2) On a cold *January* afternoon in 1866, Scarlett sat in the office writing a
 letter to Aunt Pitty. —Mitchell, *Gone with the Wind* (1866年の或る寒い日の
 午後, スカーレットはオフィスに座ってピティ叔母さんに手紙を書いていた)

(3) Next evening while he waited for her to come down-stairs, Dexter peopled
 the soft deep *summer* room. —Fitzgerald, *Winter Dreams* (明るる晩, デクス
 ターは, 彼女が階下に降りてくるのを待ちながら, 物静かな真夏の部屋にそう
 いう男たちの姿を描いていた)

(4) It was a lonely late *spring* morning. —Hemingway, *For Whom the Bell
 Tolls* (それは寂しい晩春の朝であった)

(b) 普通及び固有名詞

(1) a typical two-room *Tokyo* apartment measuring 400 sq.ft costs more than
 \$83,000 — *Time* Aug. 1, '83 (2部屋をもつ, 400平方フィートの典型的な東京
 のアパートが, 83,000ドル以上する)

(2) The cab had stopped in front of a big fake *Munich style* entrance under an

enormous sign Bohemian Beerhall. — Dos Passos, *Mid-century* (そのタクシーはボヘミアンビアホールというばかでかい看板を掲げた大きな、まやかしのミュンヘン様式の入口の前で停った)

(3) Robert Jordan saw a woman of about fifty in black *peasant* shirt and blouse. — Hemingway, *For Whom the Bell Tolls* (ロバート・ジョーダンは黒色の百姓風のシャツとブラウスを着た年が50歳ぐらいの女を見た)

(4) sturdy professional *street* beggars scowling upon mendicants of a better stamp. — Allan Poe, *The Man of the Crowd* (頑健そうなプロの街の乞食らが、もっとたちのよい物もらいをにらみつける)

これは要するに、名詞と名詞との連結力の方が、形容詞と名詞との連結力よりも強いということになるであろう。従って、名詞と名詞との間に形容詞が割り込むことは統語上あり得ぬことである。

(c) 材料などを表わす語

(1) She wore a blue *silk* afternoon dress. — Fitzgerald, *Winter Dreams* (彼女は青色の、絹のアフタヌーンドレスを着ていた)

(2) In his hand he carried a covered *wicker* basket. — Steinbeck, *Cannery Row* (彼は手にふたのついた小枝細工のバスケットを持っていた)

(3) She carried in her hands a fan of black *ostrick* feathers. — Maugham, *Jane* (彼女は手に黒いダチョウの羽毛の扇子を持っていた)

“材料”を表わす語が名詞に近接した位置をとるのは、言うまでもなく、“材料”は名詞の表示する“物”を構成しているものであり、その意味で、言語的に見ても、その名詞と極めて重要な特殊関係を“材料”を表示する語は持っているからである。

(d) 色彩を表わす形容詞

greyとかblueなどの“色”を表わす形容詞が、eyesやhairに隣接して置かれることが普通であると言える。“色”は具象性を持っており、又目の色や、髪の色は欧米人の間では“特徴”を表わすものとして、強い関心があるためと思われる。

(1) Now the professor sat back with his sharp little *grey* eyes shining through.

—Fitzgerald, *Tender is the Night* (今、教授はその鋭い小さな灰色の目を射通すように輝かせながら、深々と座っていた)

(2) He had a merry *blue* eyes, and short, untidy *sandy* hair. —Maugham, *A Marriage of Convenience* (彼は楽しそうな青い目と、短いボサボサした薄茶色の髪をしていた)

(3) he had close-cropped *grey* hair. —Id., *Flatsam and Jestsam* (彼は白髪の混じった髪を短く刈っていた)

(4) He was a shrivelled little man, with faded *blue* eyes behind his spectacles. —Ibid., *The Social Sense* (彼はしなびたような小男で、力のない青い目に眼鏡をかけていた)

(5) He was only a little boy, ten years old, with shy polite *grey* eyes. —Steinbeck, *The Gift* (彼は年は10歳、内気な愛想のいい灰色の目をしていました)

しかし、次のような語順をとることもある。

(6) His nose was small, and his black shining eyes were small too. —Maugham, *The Dream* (彼の鼻は小さかった. 彼の輝いている黒い目も小さかった)

(7) He has great dark liquid eyes, like the boy's. —Id., *A Woman of Fifty* (彼は少年のそのような大きな澄んだ黒い目をしている)

上例の *shining* や *liquid* は印象感覚を表わす形容詞であるが、*eyes* に隣接しているのは、“感情的色彩”を意図した表現のためであろう。

ところで、“色彩”の形容詞はあながち *eyes* や *hair* に限らず、それ以外の物を表わす名詞に近接して位置することが多いようである。たしかに“色彩”は具象性を持っているが、特に欧米人の感覚により鋭く訴えるものがあるからであろうか？

(8) she sketched the Grimm drawing room as a series of coal high *white* arches. —Lewis, *Main Street* (彼女はグリムの応接間の見取図を一続きの、さわやかな、白い高いアーチのようなものにした)

(9) they came into full view of the beautiful old *white* house standing behind its

green trees and terraces. —Jewett, *The Hilton's Holiday* (彼等は緑の木々とテラスのうしろに立っているその美しい、古い白い家がすっかり見えるところにやって来た)

(10) it began to rain, a slow steady *gray* drizzle like November instead of May. —Faulkner, *Old Man* (5月ならぬ11月のような灰色のこぬか雨がしとしと、小やみなく降り出した)

(11) he showed the deep smooth *red* scar. —Hemingway, *Farewell to Arms* (彼は深い、つるつるしている赤い傷あとを見せた)

(12) It (= a snail) differing in this respect from the singular high stepping angular *green* insect. —Virginia Woolf, *Kew Gardens* (カタツムリは、この点で、足を高く上げて進む角のある奇妙な緑色の昆虫とちがっている)

又この語順が守られない場合もある。

(13) A sulky look came into his *red* honest face. —Maugham, *Masterson* (ふてくされた表情が、彼の正直そうな赤ら顔に浮かんだ)

honest が *face* に隣接しているのは *red* はそれが用いられる対象が非常に多いのにひきかえ、*honest* は適用される対象が *red* のそれより狭いこともその一因をなしていると思われる。

(14) She came among them behind the man, gaunt in the *gray* shapeless garment. —Faulkner, *Spotted Horses* (彼女はその男のあとを追って彼等の中に入って来たが、ひょろ長い体に灰色の不格好な服を着ていた)

これは *shapeless* という形容詞の性質について考える必要がある。大体、*shapeless* という話の用法は服や人や物の形姿の“醜さ”に限定されるという。その意味で *gray* より用法は狭いのであり、それだけ“特殊性”があるのであって、*garment* との結合が緊密になり得るのである。

2-4 形容詞の語順についての補説

(a) 3つ以上のものがコンマなしに並ぶ型

(1) He was a big thick beefy violent man. —Dos Passos, *Mid-century* (彼は大きい、ずんぐりした筋骨たくましい粗暴な人間だった)

この文でとられている語順 *big thick beefy* について見るに、*beefy* は“人間”だけについて用いられる語であり、その意味でかなり限定された用法の語である。それに比べると、*big, thick* はもっと多面的に用いられる語であり、その意味で抽象性が高いと言える。この故に、*beefy* が *man* に近い位置をとっている。*violent* と *man* とは *Junction* が密接であるように思える。つまり、それは *a rowdy* や *a rough* (乱暴者) と一語で言い替えられるような関係であるから、*man* のすぐ隣りに *violent* は位置したのであろう。

(2) *There he found one of the drivers, a skinny yellow-faced young colored man named Warfield. —Ibid.* (そこで彼は運転手の一人、やせこけた、黄色い顔の、ウォーフィールドという名前の有色人の運転手をみつけた)

colored man は“有色人”であって、その意味で、*colored* は非常に限定された特殊性を持つ形容詞であるから、*man* との結合度は当然強いわけで、*man* にすぐ接して位置しているのである。

(3) *For some time he'd been looking for nice clean healthy outdoor work that would keep him out of mischief. —Ibid.* (ここしばらく、彼は体の故障を起こさせないような、ほどよい、清潔な、健康的な屋外の仕事を探していたのであった)

ここでも、*outdoor* は他の形容詞、*nice, clean, healthy* に比べると、用法は狭く限定されている。又 *outdoor work* は *indoor work* と対蹠的でその意味で仕事の“別”を表わすとも言える。

故に *outdoor* と *work* との結合度は強いと言えるのである。

(4) *He made a curious little dusting movement with his hand on his knee as much as to say, “That’s that.” —Greene, The Third Man* (彼は“それでおしまい”と言わんばかりに手でひざの上の塵を軽く払うようなおかしい動作をした)

dusting (塵を払う) という特殊な具体的行為を表わすこの形容詞機能の分詞は、当然、*movement* と不離な関係を持つことになる。

(5) *With a stub pen she was bringing her books up-to-date, a fine old double-entry ledger. —Steinbeck, Cannery Row* (彼女は先が短くなったペンと、最新

の本と、複式記入の原簿を携えていた)

double entry (複式記入)という複合語がある。そしてこの名詞の複合語を Hyphen でつなげて形容詞的にしたのであるが、こういう名詞的性格の複合語は他の名詞との牽引力は強いのである。また意味の上からも double-entry と ledger との結合度は強い。

(6) They turned into the little smashed-roofed mountain-resort town where brigade headquarters was. —Hemingway, *For Whom the Bell Tolls* (彼等は旅団司令部のある、屋根をつぶされた山間の避暑地の小さな町へ入った)

これも(5)と同じく、mountain resort という言い方がある。これを Hyphen で形容詞化したものが mountain-resort であるが、このように元来名詞であった複合語と名詞 town は名詞同士の牽引力で結合度は極めて強いのである。

(7) And Issac McCaslin living in one small cramped fireless rented room in a Jefferson boarding house. —Faulkner, *The Bear* (アイザック・マカスリンは、ジェファソンのある下宿屋の小さな狭苦しい火の気のない貸室に住んでいた)

rented room(貸室)や rented house(貸家)などは、small, cramped, fireless が部屋の様子描写であるのと異なり、部屋や家の“種別”を表わす言い方である。“種別”化であるだけに、rented と room の関係は、限定された、特殊的なものとなる。従って rented と room の結合度は、いちばん強くなるのである。

(b) a,b,c+名詞等の配置型について

記号の a,b,c は無論、形容詞を表わしている。

(1) It was two months before the dark, *sharp* bird eyes veiled. —Steinbeck, *The Harness* (2ヶ月程してその黒い、鋭い目に薄膜がかかった)

(2) Later, in the long, *hot* summer twilight, the ambulances came rumbling down the road. —Mitchell, *Gone with the Wind* (その後、長い、暑い夏の夕暮の中を、救急車が道路をゴトゴト音をたててやって来た)

(3) “Looming among small, *gnarled* apple trees” was one tree with rich green foliage. —*Reader's Digest* Dec. '68 (小さな、節だらけのりんごの木々の間からぼんやり見えているのは、緑の葉の生い茂った一本の木であった)

上例(1)では sharp, (2)では hot, (3)では gnarled が、それらの前にある形容詞と

コンマで切れているので、Perrin⁽²⁾によれば、sharp, hot, gnarled が独立的に名詞を修飾することになって強調される結果になるのである。

しかし、'You better take a sandwich', all this in a low, smooth, polite nigger voice. —Hemingway (「サンドウィッチを持って行ったほうがいいのだ」、こうしたことが低い、穏やかな、丁寧な黒んぼの声で語られた)、のような場合、つまり、3つの形容詞がコンマで切られて並置される場合は、それらの形容詞は名詞 voice に対して同じ関係にあるわけで、特に“強調”ということはないと言える。

(4) he went down, down, faster and faster in a rush down the last, long steep slope. —Id., *Cross-Country Snow* (彼は、最後になった長い急な坂道を、ますます足早に、まっしぐらに降りて行った)

上例の long steep slope において、steep と long は共に slope そのものの直接的な具体的な描写になっている。従って long steep の間にコンマなしに二語は連続的に並置されている。しかるに、the last は slope そのものの描写ではなく、いわば間接的な“説明的”修飾をしている。つまり物自体の描写と物に対する観念的説明との修飾における差異がある。従って the last の次にコンマが置かれて、独立的に slope を修飾する形をとっているのである。

又、ここで注意すべきは、long steep slope という句の修飾形態は long (steep slope) という、つまり long は steep slope を修飾するという重層的な修飾形態をなしていることである。

the dark, gray sky と the dark gray sky⁽³⁾とを比較すると、前者は「暗くて灰色の空」であるが後者は「暗灰色の空」となるのである。

ちなみに、上例の long steep slope において long steep となっている語順は steep が名詞の slope と頭韻を踏んでいるからであろう。

(5) the lion lay, with uplifted, white-muscled tendon-marked naked forearms and white bloating belly. —Hemingway, *Happy Life of Francis Macomber* (ライオンは、白い筋肉の腱のあからさまになった裸の前脚を持ち上げ、白いふくれ上がった腹を見せて横たわっていた)

この場合も、uplifted という forearm の“動作”についての描写と、white-

muscled tendon-marked nakedのようなライオンのforearmそのものの実体を直接描写する修飾内容の相違は明らかである。従って uplifted の次にコンマがあって分離された修飾形態をとっているのである。

(6) I emerged from the woods, hungry, to see, standing in a clearing, a small, pleasant-looking white house with green shutters. —*Reader's Digest* Mar. '65 (私が空腹をかかえて森から出て、開墾地に立っていると、雨戸がみどり色の、小さな快適そうな白い家が見えた)

上例の場合、smallもpleasant-lookingもwhiteも、いずれも、houseの直接的な具象的な描写をなしている。しかるにsmallだけがコンマで分離されている。これはpleasant-looking white house with green shuttersの部分が、家の“白さ”と雨戸の“緑色”の色対照、“快適そうに見える”家という風に、どちらかと言えば、印象的な感覚的な描写となっている。ここに描写の重点があると言える。そこでsmallをコンマで切ってpleasant-lookingを目立たせようとしたのであろう。

(7) 'What do you want to eat, Daughter?' the Colonel asked, looking at her early-morning, untouched dark beauty. —Hemingway, *Across the River into the Trees* (「何を食べたいかね、娘さん」と大佐は、彼女の早朝の、まだ手を加えぬ暗い美しさを眺めながら尋ねた)

これも例(6)と同じような説明ができると思われる。

(8) Hot tears trickled down Guy's funny, round spotty face. —Maugham, *The Force of Circumstance* (男のひょうきんそうな、しみだらけの丸顔に、熱い涙がぼたぼた落ちた)

この場合は、funnyが主観的な描写を表わし、round spottyは顔の客観的な具象的な描写をなしている。funnyがコンマで分離しているのは合理的である。

(9) He was a short, rather stout young man, with a shock of untidy carrot hair. —Maugham, *The Colonel's Lady* (それは、だらしない、くしゃくしゃした赤毛の、背の低い、どちらかと言えば、がっちりした若者であった)

(10) But one also senses - occasionally, distantly — a disconcerted, vaguely frantic emotional vibration. —*Time* Aug.1, '83 (しかし、誰しも、時折、ぼん

やりと当惑した、なんとなく、狂気じみた日本人の情緒的な不安を感知するのである)

上例(9)と(10)は同じ説明がつけられると思うが、(9)では rather が short と stout の間に在るから、又(10)では disconcerted と frantic の間に vaguely がはさまっているために、統語上から言っても当然コンマが置かれなければならないと言える。

2-5 数詞 (Numerals) の語順の移動

“数詞”には Cardinal numerals(基数詞)と Ordinal numerals(序数詞)の2種類あるが、それらは冠詞と共にその用法の広汎性において、非常に描象性の高い語である。故に前述したように名詞から一番遠い位置をとる冠詞から始めて、すなわち、①冠詞+②序数+③基数の語順をとるのである。しかし、場合によっては、この語順が破られることがある。

(1) “So that disposes of that”, said Miss Fowler, tapping the palm of one hand with the *ringed third* finger of the other. —Rudyard Kipling, *Mary Post Gate* (「それでその片がつくわ」とファウラー嬢は指輪のはまっている薬指でもう一方の手のひらを軽くたたいた)

third finger は“薬指”で一つの“実体”を表わす名詞と化しているから、不離の結合であって ringed との語順の交代は不可能である。

(2) sometimes, for a few painful minutes, she believed it to be no more than friendship —Jane Austen, *Sense and Sensibility* (時々、苦しい数分間であるが、彼女はそれは単なる友情にすぎないと信じた)

これは普通の語順である。

(3) They had jointly suffered all the crises emotional social economic and even moral which do not always occur even in the *ordinary fifty* married years. —Faulkner, *Old Man* (彼等はともども、平凡な50年間の結婚生活でも必ずしも起こらないあらゆる危機、情緒的、社会的、経済的、はた又、道徳的な危機までも甘受したのである)

上例において、普通考えられる語順 *fifty ordinary years* とならずに *ordinary*

fifty という位置をとっているのは、主要名詞 years に fifty が牽引されて、つまり fifty years との結合の強さが働いたのではないであろうか。これを日本語流で言えば、結婚生活 50 年ということになる。

(4) She hoped that the child's mother would outgrow all the memory of the accidental seed sown, as the saying runs, in a foolish five minutes. — George Moore, *Albert Nobbs* (彼女はその子の母親が、愚かしい 5 分間に、ことわざで言う、偶然に播かれた種子のことを時とともに忘れ去ることを望んだ)

この例文では、five minutes が分割され得ない結合体と考えられている。故に不定冠詞の a が付いているのである。つまり、five minutes が一つの統合された実体名詞化しているのである。つまり、5 分間(five minutes)が“特殊性”を持たされている。故に、foolish は five minutes を修飾することに必然的になるのである。

2-6 形容詞＋分詞＋名詞の型

この型の原型は一般に、nice-looking, low-bred のように、Hyphen で連結される type であるが、この型の拡大用法、つまり、Hyphen なしのものが時々見られる。米語に多いようである。

(1) He was *the puzzledest looking man* I ever saw in my life. — Passos, *Mid-century* (彼は私が今までに会った人の中でも、もっとも謎めいた人物であった)

(2) Sort of *dancy and tight looking* with the jock keeping a tight hold on then (=the horses) — Hemingway, *My Old Man* (ダンスでもしているみたいにさっそうとした緊張した様子をし、騎手はその馬をしっかりと御している)

この文では、dancy と tight が共に looking に結び付いている。非常に自由な用法である。

(3) the old man came back with the *skimiest, hungriest, most un-successful looking* of wanderobos. — Id., *Green Hills of Africa* (これまで見てきたワンデロボ族の中でも一番やせて、ひもじそうな、一番不運そうな男をつれて戻ってきた)

(4) A friend of mine was being teased by her husband about her *late sleeping* habits. —*Reader's Digest* Dec. '71 (私の或る友人は、彼女の夫から、朝寝坊のくせをからかわれていた)

(5) on some there were *red and white striped* tableclothes. —Hemingway, *Homage to Switzerland* (いくつかのテーブルの上には赤と白のしま模様のテーブルクロスが置かれていた)

(6) He was *shaky and hollow sick feeling* inside. —Id., *Islands in the Stream* (震えがきて体の中がうつろで胸がむかつく様であった)

(7) He sat there, sweating under arms, his mouth dry, his stomach *hollow feeling*. —Id., *Happy Life of Francis Macomber* (腋の下に汗をかきながら、彼はそこに座っていた。口はからからに渴き、胃はからっぽな感じがした)

(8) 'Good night', said the young pleasant speaking one. —Id., *To Have and Have Not* (「お休みなさい」, 気持のいい口をきく若い男が言った)

(9) He was mean talking now —*Ibid.* (全く小憎らしい口をききやがる)

上例によって分るように、HemingwayにはHyphenなしの自由な言い方がかなり多く用いられている。しかし、Hyphenのある型が用いられることもある。

Harry asked pleasant-speaking one —*To Have and Have Not*(ハリイはその気持のいい口をきく若い男に尋ねた)

2-7 a+形+sort of+名と a sort of +形+名の型

⁽⁴⁾Kruisingaによると、sort of を含む group では、それがその独立の意味を保有しているとき、又は sort of が単独の名詞のみを修飾するときは、sort of の前に形容詞がくると言われる。

(a) a+形+sort (kind) of の例

(1) But he was also hungry, with *a gnawing, unwholesome kind of* hunger. —George Orwell, *Nineteen Eighty-Four* (しかし、彼はまた空腹だった。食い込むような、体にさわるような空腹だった)

見られるように2つの修飾語が kind に従属している形態をとっているのに、kind の独立性は高まっていると言える。

(2) That was just as well because Sam Hawkins who represented management was a reasonable kind of an egg. — Dos Passos, *Mid-century* (経営者側代表のサム・ハウキンスは思慮分別のある男だったから、その方がよかった)

(3) He smiled in a forced kind of way. — Moravia, *Two Women* (彼はにがにがしそうに笑った)

(4) a melancholy, listless kind of person with a riotous mop of greying hair above his forehead. — *Ibid.* (白くなりかけた、ふさふさした頭髪を持つ、物思いに沈んだ、ものうげな人)

(5) He walked very upright, in a proud, dignified sort of way. — *Ibid.* (彼は誇らしげな、いかめしそうな様子をして、背中を真直ぐ伸ばして歩いた)

(6) they (=the words) bear witness to her own particular sort of perfection which I have already mentioned. — *Ibid.* (これらの言葉は、他ならぬ彼女の人の柄の特異な完成を如実に特語っている)

(b) a sort (kind) of + 形 + 名の型

(1) Foreigners, whether from Eurasia or from Eastasia, were a kind of strange animal. — George Orwell, *Nineteen Eighty-four* (ユーラシアであろうと、イースタシア人であろうと、外国人は一種の異様な動物だった)

(2) the fourth, who was haggardly thin and dark, wore a sort of severely cut militiawoman's uniform with a skirt with high boots under it. — Hemingway, *For Whom the Bell Tolls* (やせ衰えて色の浅黒い女は、いかめしい仕立ての女義勇軍の制服にスカートを穿き、長靴を履いていた)

(3) We ate the soup, which was a kind of thin, greasy broth which the flesh of an old *he-goat* had been boiled. — Moravia, *Two Women* (私たちはそのスープを飲んだ。それは年とった雄山羊の肉を煮込んだ、うす味のあぶらっこいだし汁の一種だった)

(4) the albino gave a sort of mocking laugh. — *Ibid.* (その白子はあざけるように笑った)

(5) 'And what are there workmen like in your opinion?' he asked then, with a kind of teasing look. — *Ibid.* (「そしてこれらの職人は、あなたの意見ではど

ういう人々ですか」と彼はその時、冷やかすような顔をして言った)

(6) he swallowed a couple of mouthfuls, then continued speaking, with a sort of *pedant's* passion. —George Orwell, *Nineteen Eighty-Four* (彼は二口でパンを飲み込むと、 銜学者の情熱的な調子で語りつづけた)

(7) Julie uttered a tiny sound, a sort of squeak of surprise. —*Ibid.* (ジュリアは小ぢゃなきしむようなかん高い驚きの声を発した)

(6)と(7)とでは, sort of は名詞の属格形+名と又 of を含む名詞グループに従属している。

(8) In fact, it is even possible that he himself was religious, but with a kind of disillusioned religiousness. —Moravia, *Two Women* (実は彼自身, 信心深かったのかもしれない。しかも, それは幻滅を持ちながらの信心だった)

a sort of + 形 + 名の型は sort of が形容詞 + 名詞のグループに全く従属していることを表わしている。OEDによれば, sort of は “denoting that some thing, person, quality, etc., is, may be, included in the specified class, although not typical of it or possessing all its characteristics, = something in the nature of” である。つまり, a sort of strange animal「奇妙な動物のようなもの」のように, sort の独立的意味は失われて, 従属的な役割を演じているに過ぎない。主観的で, 緩和語とも言うべきものになっているのである。

2-8 the + 形容詞 + 固有名詞

今までは, 形容詞が前方から普通名詞を修飾する場合を扱ってきたが, 固有名詞が形容詞によって修飾される場合を見てみたい。

(1) ‘How is the beautiful red-faced Mr Wilson?’ —Hemingway, *Happy Life of Francis Macomber* (赤ら顔の美男子のウィルソンさんはお元気ですか)

(2) ‘Mr Robert Wilson’, she said. ‘The beautifully red-faced Mr Robert Wilson.’ —*Ibid.* (「ロバート・ウィルソンさん, 赤ら顔の美男子のロバート・ウィルソンさん」)

これらの例文の the beautiful red-faced は, Wilson という人間に対する愛称とも, 又親しさの込められた nickname と言ってよいものであろう。

(3) The white-haired, grandfatherly Chernenko might still be the nostalgic favorite of entrenched and aging bureaucrats who remember the old days under Brezhnev. — *Time* Feb. 2, '84 (白髪のおじいさんと言った様子のチェルネンコはやはり、ブレジネフ時代の昔を憶えている、保身で固まった、老化した官僚に郷愁を感じてその肩を持つ人間であるかもしれない)

(4) Sadat's visitors became accustomed to seeing the stocky, taciturn Mubarak sitting near the President. — *Ibid.*, Oct. 19, '81 (サダトの訪問者たちは、あのがっちりした、無口な男、ムバラクが、いつも大統領のそばに座っているのを見慣れていた)

(5) But after more than 26 years as Foreign Minister, the "Grim Grom" as he is known in Western diplomatic circles, has not built a political power base at home. — *Ibid.*, Feb. 12, '84 (26年以上も、外相を務めても、西欧の外交界において、その名で通っている「冷厳なグロム」は国内で政治的地盤は築いていないのである)

上例(1), (2)は Hemingway の小説の中の会話であって、非常に familiar ないきいきした口語の姿を見せていると言える。しかし、例文(3), (4), (5)はいずれも「時事英語」であって、記者の目は冷静になってはいるが、それぞれの人物に対する記者の familiar な気持は若干出ていると言ってよいであろう。特に(5)の "Grim Grom" は「グロムイコ外相」のことを言っているのだが Grim と Grom で頭韻を踏んでおり、「愛称」めいた気持は出ているのである。

さらに、もう一つ、次のような用例を挙げておこう。

(6) The 30-year-old Turnbull, who was seeded second and who earned \$23,000 with the triumph, had two set points in the first set. — *The Japan Times* Dec. 14, '82 (30歳のタンブルは、2番目にシードされて、その勝利で23,000ドル獲得したが、第1セットで、セット・ポイントを2つ取った)

この例では、Turnbull を修飾しているのが 30-year-old であって、これは、great, beautiful, grim, grand fatherly 等のような「特性」を表わす形容詞の類とは異なる修飾語である。従って、こういう場合は、むしろ neutral な言い方であって、familiarity は有るにしても、その程度は微量であると言ってよいもので

ある。

2-9 too a + 形 + 名 と a too + 形 + 名の型

先づ例文を示して見よう。

(1) He had too sincere an affection for her now ever to become her lover.
—Maugham, *Theatre* (今のところ、彼の彼女に対する愛情はあまり誠実すぎて、そのため彼は彼女の恋人になれなかった)

(2) She held Pyle's dog on a leash — a black chow with a black tongue. A too black dog, — Greene, *The Quiet American* (彼女はパイルの犬を皮ひもでつないでおいだ。黒い舌を持つ黒い犬(中国産の犬)で、あんまり真黒すぎる犬だ)

⁽⁵⁾ Poutsmaによれば、強意語(Intensive) too のあとに不定冠詞 a がくる、前者の型が普通であるが、不定冠詞 a が too の前にくる型もよく用いられるとのことである。因みに、筆者は現代の英米の作品の中から、それぞれ3人ずつ選んで、上述の2つの型の用いられる頻度について調べてみた。イギリスでは Orwell の *Nineteen Eighty-Four*, Greene の *The Quiet American*, Maugham の *Theatre* について調べ、アメリカでは、Cather の *A Lost Lady*, Fitzgerald の *Tender is the Night*, Steinbeck, *To a God Unknown* について調査した。そして次のような結果が得られた。

	Oerwell	Greene	Maugham	計		Cather	Fitzgerald	Steinbeck	計
too a....	1	1	1	3	too a....	1	2	1	4
a too....	0	1	0	1	a too....	0	1	0	1

結局、英米の使用度を合計すると、too a.... の型は7例あり、a too.... の型は2例にとどまった。よって、too a.... の型の方がa too.... の型よりもより多く用いられると言うことが分るのである。

しかし、又 Poutsma は too が not によって否定されるときは、不定冠詞の a が前置されると言い、at a not too distant date や a not too impatient reader のような例を示している。

しかし、This seems not too difficult a passage⁽⁶⁾ という言い方もあることは注意

されなくてはならない。さらに、tooによって2つ以上の形容詞が修飾されるときは、最初の形容詞のみがaに先行することになる。

We must avoid too great a mental strain.⁽⁷⁾(われわれは、あまりひどい精神的緊張は避けねばならない)

2-10 a + 形 + enough + 名の型

enoughを含む構文ではこの表題の型のものが一般的であると言うことができる。

(1) 'And to listen and say nothing is a cold enough aid.'—Hemingway, *For Whom the Bell Tolls* (聞き入っているだけでなにも言わないなんてずいぶん冷淡な助力というものだ)

(2) 'You're my manager. You get a big enough cut, don't you?'—Id., *Fifty Grand* (あなたは私のマネージャーだ。かなりたくさん分け前をもらうでしょう)

しかしながら、又、次のような語順をとることもであると指摘されている。もっとも誰もがこれを正常であると認めるわけにはいかないという但し書き付きである。⁽⁸⁾

(3) He is (not) brave enough a student to attempt the course. (彼はそのコースを試みるほど勇氣ある学生ではない)

さらに、enoughよりも文語的な sufficiently を用いた Poutsma の次のような例文があるので付記しておく。

(4) I doubt whether Lord Kitchener is of sufficiently pliant a nature to find favour with the War Office. (キチェナー卿が陸軍省に気に入られるほど融通のきく人であるか疑わしい)

3 後方からの修飾

この種の修飾については、①分詞のその動詞的な力がいちじるしく現われている場合、②形容詞が、その叙述的力をかなり含んでいる場合、③形 + 名 + 形

の型, ④ who などのいわゆる“関係詞”によって後方修飾される, 4つの形態について論考しようと思う。

3-1 動詞的な力の強い分詞の後置修飾

(1) He knew Zurito would pic for him. He was the best picador living.
—Hemingway, *The Undefeated*. (槍はスリトが引き受けるときまった。スリトこそいまの槍手の中でもっともすぐれていた)

(2) He dropt his chin like a man shot-Curme (彼は撃たれた人のようにかっかりした)

この場合には man よりも叙述力的な力を持っている後置の shot により強いアクセントが置かれることになる。

3-2 叙述的な力の強い形容詞の後置

(1) The sad story of every man alive. —Saroyan, *Bitten off by a Circus Tiger* (生きとし生ける人の悲しい物語)

(2) I was the first boat out and you never saw water like that was.
—Hemingway, *After the Storm* (おれが一番乗りだったが, 誰もあんな水を見たことがあるめえ)

(1)と(2)の alive と out は本来的に後位置⁽⁹⁾をとる修飾語である。out の場合は副詞の形容詞用法とすることができる。

この外, Curme⁽¹⁰⁾には, -ble の語尾を持つ形容詞の後置修飾用法として, gorges nearly impassable(ほとんど通り抜けられない峡谷), sufferings unspeakable(言語に絶する苦しみ), the only person visilbe(目に見えるただひとりの人)などがある。

そして, これらは, いずれも, 後置の形容詞により強いアクセントが置かれるのである。

この外, 元来は副詞であるが, 後位置を取って形容詞の機能を持つ場合も忘れてはならない。

(3) In a sermon not long ago, I condensed the life history of such a man.

——*Reader's Digest* Dec. '71 (今から遠くない昔の説教で、私はかかる人間の生活史を簡約して述べた)

(4) a tremendous shout of hundred voices,——women's voices——had burst from a side-street a little way ahead.——Orwell, *Nineteen Eighty-Four* (何百という声、女の人のすさまじい叫び声が一斉に少し行った先のとある横町から突然起こった)

(5) Madam Stella, the greatest diver in the world, is about to dive from a height of sixty feet into a lake of flames five foot deep.——Maugham, *Gigolo and Gigolette* (この世でまたとない飛び込みの名人、ステセラさんが60フィートの高さから、深さ5フィートの火だるまの貯水槽に飛び込まんといたします)

(6) This attack was going to be his biggest show so far.——Hemingway, *For Whom the Bell Tolls* (この攻撃はこれまでの彼の最大の見せ物になりそうだった)

(7) A dinner in Detroit to celebrate the culmination of twenty-five years in the labor movement turned out to be the biggest ever.——Dos Passos, *Mid-century* (労働運動25年間に達せられたその全盛を祝うデトロイトの晩餐会は今までの中の最大のものとなった)

(6)と(7)の so far と ever のように最上級に後置されて「今までにあった中で」という意味を表わす短縮された言い方は、アメリカ英語で好まれるようである。

以上の外に、フランス語の影響を受けて出来た英語の決まり文句に形容詞の後位置が固定しているものがある。例えば、the President elect(大統領当選者), fee simple(単純封土権), the sum total(総計), court martial(軍法会議), the body politic(政治的統一体), Poet Laureate(桂冠詩人), Postmaster General(郵政長官), from time immemorial(太古から), devil incarnate(悪魔の化身)などがある。そしてこれら後置の形容詞には強勢がおかれるのである。

3-3 形容詞＋名詞＋形容詞の型

前方から形容詞が名詞を修飾し、その名詞を後方から1つ又は2つ以上の形容詞が修飾するという型がある。

(1) She was a skilful controversialist, quick, logical, and incisive.—Maugham, *Mayhew* (彼は巧みにして、鋭敏、論理的且つ又辛らつな論客だった)

いくつもの形容詞を名詞に前置して並べるのは修飾の形式としては単純すぎることに成り、又、リズムとしても単調に流れ易いことになる。

(2) It was a grey, cloudy day, but not cold.—Id., *The Unconquered* (その日は灰色に曇っていたが、寒くはない日であった)

上例では後置の形容詞の cloudy と cold とが頭韻(Alliteration)を踏んでいてリズムの調子もよいと言える。

(3) But when they went up to the house they were met by a tall, handsome native woman, no longer younger.—Id., *The Fall of Edward Barnard* (しかし、彼等がその家に行くと、背の高い、綺麗なもう若くはない原住民の女が、彼等を出迎えた)

上例の(1), (2), (3)とも同じように名詞とその後置の形容詞の間にコンマがあることにより、後置の形容詞が余計に目立ってくるのである。

(4) A very strange girl, very sweet—very! —Jennessee Williams, *A Streetcar Named Desire* (ほんとに珍らしい^{ひと}女、とっても可愛い女、とっても!)

この文では、very が三度繰り返されている。さらに strange と sweet とが頭韻を踏んでいて very の繰り返しと相俟って、感情のリズムの高揚がみられるのである。

(5) She was a fine woman, marvellous really.—Hemingway, *The Snow of Killimanjaro* (彼女は素適な女、実にすばらしい女であった)

後置の marvellous に強調が目立っている。

(6) He was a Magyar, a very nice boy and very shy.—Hemingway, *The Revolutionist* (彼はマジャール人で、とても気持のいい、内気な青年だった)

very が繰り返され、boy の y と shy の y とが韻を踏んでいる。「音」のひびきはよい。

(7) “It’s a very good name, and very unusual.”—March, *The Last Meeting* (「それは非常にいい、しかも非凡な名前だよ」)

この(6)と(7)の例のように、and を挟んで後置の形容詞がくる型は米語によく見られる。

3-4 関係詞による後方修飾

関係詞による後方からの修飾には、周知の如く、制限的な修飾と非制限的修飾の二通りがあるが、これらについて少し考究してみたいと思う。

制限的修飾と非制限的修飾の基本的な分れ目は、関係詞の先行詞を“特定する”か否かに在るのではないと思われる。例えば、He was a lousy Jew who was scared to death by the world—Saroyan(彼は世間をひどくこわがっている卑しいユダヤ人であった)のような場合は明らかに who 以下の“節”が先行詞の a Jew についての“特定化”を行っている。他方、There I met an old gentleman, who introduced himself as lawyer.(そこで私は一人の紳士に会った。弁護士とのことだった)、この場合、先行詞の an old gentleman と who 以下の関連は loose であると言える。“弁護士として自己紹介した”ことと先行詞の old gentleman との観念の連係は、“特定化”と言うのにはあまりにもゆるいように思われる。つまり、老紳士についての追叙の説明にふさわしいものである。この場合、非制限的用法になるのは当然であると言える。

(1) Around the edge of ring running two men dressed like tramps, followed by a third in the uniform of a hotel-boy who stooped and picked up the hats and canes thrown down on to the sand and tossed them back into the darkness. —Hemingway, *The Undefeated* (リングのふちを、浮浪者の身なりをした2人の男が走りまわり、そのあとをホテルのボーイの制服を着た男が追いつながら、かがんでは砂地に投げられた帽子や杖をとり上げて、暗闇の中へ投げかえしていた)

上記の例文における who 以下が a third(3人目の男)についての“特定化”を行っているとするのは不自然である。形態的には、who の前にコンマがないのでそれが制限節を導くように見えるが、それは真理ではない。a third と who とは loose な連結をなしているのであって、a third の行為を単に説明しているのである。関係詞の前のコンマの無いことが、制限的用法になるとはかぎらない

と言うことは注意さるべきである。

(2) There were three boys who came each day who were about the same age I was.—*Id., In Another Country* (ぼくと同じくらいの年頃で毎日やってくる3人の少年がいた)

これは、制限用法の who が二重に用いられている、“特定化”描写の例である。そしてあとの方の who 以下は、前の three boys who came each day という一群の句全部を修飾していることになる。つまり、重層的修飾構造をなしているのである。

(3) Wilson spoke to the older gun-bearer, who wore a canteen on his belt.—*Id., Happy Life of Francis Macomber* (ウィルソンは、ベルトに水筒をつけている年上の方の銃のかつぎ人夫に声をかけた)

この場合は、who の前にコンマがあって非制限用法となっている。何故ならば、先行詞の the older gun-bearer について定冠詞 the はこの文の前に既に2人の gun-bearer の記述があって、その中の年上の方の gun-bearer を指示する“特定”の the なのである。つまり、この the older gun-bearer はすでに“特定化”されているのである。従って後置の who 以下はことさらに“特定化”する理由がなくなっているのである。ゆるやかな説明的叙述ですませてよいのであろう。

(4) the man unscrewed the top and handed it to Macomber, who took it noticing how heavy it seemed.—*Ibid.* (その男はせんを抜いてそれを(=水筒)マコーバーに渡すと、彼はずいぶん重いなと感じながら、それを受け取った)

この場合も、who の前にコンマがある。それは、Macomber は固有名詞であって“特定性”が極めて強い。従って、もはや“特定化”描写の理由はなにもないのである。故に who 以下は Macomber とゆるやかな関係をなして、説明的な叙述で事足りているのである。

(5) I was right not to be afraid of any thief but myself, who will end by leaving nothing.—*Katherine Porter, Theft* (私よりも恐れているのは外ならぬ私自身がどろぼうとなる、精神的なものを盗む盗人となることだと思っていたのは正しかったのだ。何故なら、結局、私には貴いものがなにも残らなくなるからだ)

私が“私自身”のことを述べるのに“特定化”の必要はさらさらない。“私自身”はもっとも特殊性を持つ存在であるからである。

もう一例示そう。

(6) I, who have never been able to endure card games, was quite unable to understand how they could spend entire days gambling.—Moravia, *Two Women* (私はトランプ遊びを決してがまんできない人間なので、彼等がどうして朝から晩まで、賭けをして過ごすことができるのかさっぱり理解できなかった)

この例文の who の非制限用法も「I」を先行詞としているから上記の(5)についての説明と同じである。

(7) I remember nothing of its contents except a story about Socrates who when offered the chance of escaping from prison, replied, “No, we must respect the national laws.”—Donald Keene, *Confessions of a Japanologists* (ただ私が憶えているのは、その中の、脱獄する機会があったのに、「いや、われわれは国法を尊重しなければならない」と答えたソクラテスの話だけである)

ここでは、Socrates が Proper noun であるにもかかわらず、それにかかる who が制限用法になっている。これは何故であろうか？ そのわけは、Socrates が語ったとされる言葉に対してドナルド・キーン氏が疑念を抱いているからである。キーン氏は、ソクラテスの国法に対する絶対服従について、キーン氏自身が持っていたソクラテス観と異なっていると感じているのだ。ここに引用された例文のあとに続いて、I wondered if this was not another instance of Japanese militarism という文章を、キーン氏は書いている。つまり、国法に服従するソクラテスは、いわゆるソクラテスの実像ではなく、日本の軍国主義が作り上げた虚像ではないか、つまりそういう、特定化された虚像であるソクラテスという意味で、Socrates にかかる who が、それが固有名詞であるのに、制限用法になっていると考えることができる。

4 むすび

⁽¹¹⁾ Krusinga は、名詞に前置して修飾する形容詞は、その名詞の偶然的でない、

永続的な性質や特性を表わすと述べている。これに反し、名詞のあとにあって後方から修飾する場合は、その形容詞は、叙述的(Predicative)な性質を持つに至る、つまり、一時的な性質を持つことになるのである。

そして、この名詞に前置の形容詞はこのような特色を持っているのであるが、さらにそれら形容詞の間で意味の“恒常性”の強弱によって語順が決められるのである。stone や iron などの“材料”に見られる恒常性、又、American, Russian などの国籍を表わす語の中にある恒久性、特殊性、そしてこの種の語が一般に名詞に近接した位置を取るのである。又、amusing, beautiful などの主観的色合いの語、small, big のような多くの対象物に広く適用される、一般性、抽象性の高い語などは、名詞から離れた位置に置かれる。このように、語の意味の持つ“恒常性”、主観の度合の強弱、語の適用範囲の大小、語と語の Junction の密接性、これらの要因が複合して、形容詞の位置が決められるという面のあることは注意さるべきである。

英語にあっては“語順”ということが、重要な意味を持つということは記憶さるべきことである。

[注]

- (1) *Syntax* p. 62
- (2) *Writer's Guide and Index to English* p. 543
- (3) Sweet は *New English Grammar*, II p. 8 で次のように述べている。 “In bright blue sky = brightly blue sky the position of the first adjective is partly due to its being logically a modifier of the second one”
- (4) 名 + of + 形 + kind の型がある。 Her perfection, however was not of the kind that is suitable to wartime, which demands qualities of a different kind.—Moravia, *Two Women*
- (5) *A Grammar of Late Modern English*, I pp. 534~537
- (6) “Some Notes on the construction Adjective + A + Noun” *English Studies*, Vol. 59 Number 6
- (7) *Ibid.*
- (8) *Ibid.*
- (9) nationwide が名詞に後置された次のような例もある。 The National Police

Agency last week called on the police offices nationwide to cooperate with Osaka and Hygo Police to solve the case quickly.—*The Japan Times* April 19, 1984

(10) *Syntax* p. 66

(11) *A Handbook of Present-Day English*, II p. 214